



御修復のあゆみ

く 伝承された先達の願い

阿弥陀堂の新調する獅子口瓦製作中

御影堂と阿弥陀堂両堂の屋根に葺かれている瓦には、「平瓦」と「丸瓦」が最も多く使用されていますが、「獅子口瓦」や「隅巴瓦」など「役瓦」や「役物」と呼ばれる特殊な種類の瓦も屋根の一部には使われています。

阿弥陀堂では、「役物」の瓦にも損傷が多く見受けられたため、今回の御修復で新調する必要がありますが、使用枚数が少なく形状も特殊であることから、その多くは一つひとつ手作業で造られています。

とりわけ「大棟獅子口」などは、瓦自体も非常に大きいため、製作にかかる日数も長く、技術的

にも苦勞が多いそうです。

瓦の作り方は、本誌二〇一二年十月号でもご紹介したとおり、土練→成形→乾燥→焼成→いぶし→冷却という過程を経て行わ

れますが、あまり

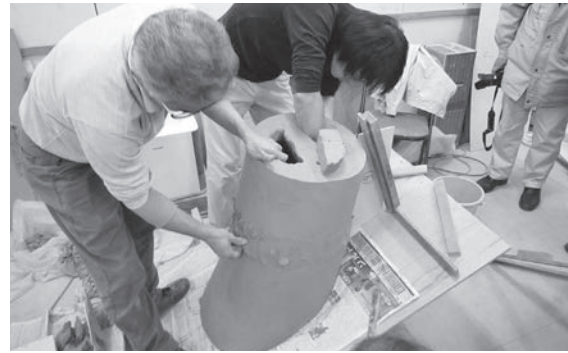
にも大きな瓦は一度に成形すると自重で下部が変形してしまいます。そ



降るす前の阿弥陀堂大棟獅子口瓦



成形が済み乾燥中の大棟獅子口瓦のパーツ



大棟獅子口瓦(経の巻)の成形

ここで、少しずつ粘土を組み上げて、少し乾いては次の部分を繋げていくといった作業が繰り返されます。

また、組み上げた後も、窯に焼入れするまでに十分に乾燥していることが必要なのですが、厚みもある巨大な瓦は、部分的に乾燥の度合いがちがうため、急激に乾燥させると、ひび割れが生じたり、形が変形したりし



降り棟獅子口瓦の成形

てしまいます。このため、二〜三ヵ月かけて四十度前後でゆっくりと乾燥させます。時には、毛布をかぶせて急激な温度の変

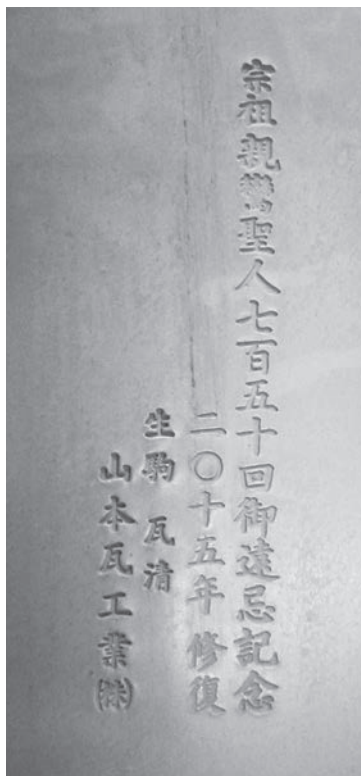
化がないように、また、部分的に乾燥度合いが進んでいる箇所には加水をおこなったりして、全体として少しずつ慎重に乾燥が進められます。これにより成形当初から六%前後まで収縮し

この後、窯入れを行い、これも慎重に焼成されてでき上がりとなります。なお、焼成途中で、成形・乾燥された粘土の中に部分的に水分が多く残っていたり、気泡が含まれていたりすると、窯の中でそれ自体が爆発してしまい、その瓦自体はもちろん、一緒に窯入れた瓦まで傷んでしまいます。慎重にかつ丁寧に作業が進められてきたものであっても、何らかの原因により失敗してしまうことも多く、完成までは一時も気が抜けない作業となります。

獅子口瓦 (経の巻)

阿弥陀堂屋根の棟の両端に葺かれる鬼瓦の一種。雨の侵入を防ぎ、装飾として多くの寺社建築などで用いられています。

阿弥陀堂の大棟、^{くだり}降棟、^{すみ}隅棟、^{ちご}稚兒棟などの棟の端には将棋の駒のような五角形の箱の上に3本の巴瓦をのせており、大棟には、足元に雲を図案化された鱗瓦もついています。特にこの巴瓦にはお経の巻物の断面に似ているところから「経の巻」とも呼ばれています。



成形の最後に記される刻印